研究室訪問

この人に聞く
後藤範章 先生

訪問日
1999年12月３日

聞き手
社会学科４年
船山健介
（後藤ゼミ・1999年度ゼミ長）
原田たか子
（同・副ゼミ長）

弱い部分も赤裸々に

今日は，先生が歩んでこられた道のり，教育・研究活動のことや学生への思い，これからの抱負などについてお話しいただければ，と思います。

人生の行方定まらない学生の皆さんに少しでも参考になればと考え，日頃は表に出さない弱い部分，失敗や挫折経験もさらけ出して，できるだけリアルに話しましょう。

能天気な人間だった

高校時代は考古学をおやりになっていたそうですが，もうその頃から学問への興味や関心があったのですか？

考古学との出会いをお話しするためには，受験エリートになれなかったことに触れておかないといけません。

今からもう30年近く前の話になりますが，ぼくの出身高校*1は，そこそこの歴史も伝統もある進学校ではあったのだけれど，受験可能な広域学区で見ると二番手校でした。中学の時，トップ校*2に手が届くかどうかのボーダーラインあたりにいたのに，早々に競争から降りてしまって，安全で楽な道を選択してしまったんです。自分の存在と可能性をかけて勝負する前にあっさり逃げてしまった。時間とエネルギーを費やして何事かをコツコツとやり遂げる努力もせず，結局は途中で投げ出してしまう。そのくせ，それを重く受け止めないばかりか，可能性だけは人一倍あると信じて疑わない，そんな能天気な人間だったのです。

泥と汗にまみれて

だから，考古学をやるようになったのも，自分の興味や適性を考えてのことではありません。高校に「考古学部」があったんですが，クラブ活動の説明会の時，楽ができると思えたので入部したわけ。ところが，これが大違いで，入部早々から日曜日には古墳群の発掘調査にかり出され，夏休みには発掘現場近くに合宿して炎天下で毎日発掘作業を続け，冬場から春先にかけては埋蔵文化財の分布調査や前方後円墳の測量調査。平日には勉強会とか，土器片や埴輪片の整理……。土日も夏休みなどの長期の休みもほとんどなく，調査に明け暮れる毎日でした。勿論，クラブ活動だから無償で。泥と汗にまみれながら，かなり本格的な調査研究活動にあたったわけです。

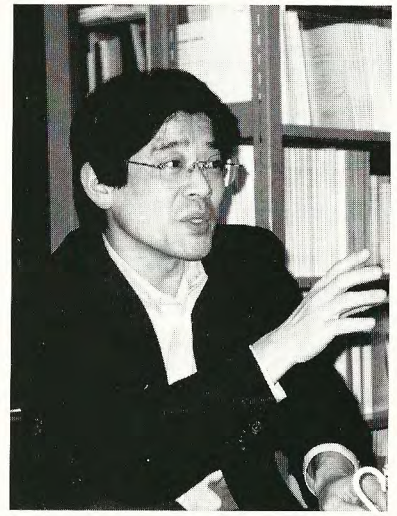
*1 埼玉県立本庄高校。群馬県からの越境入学だった。

*2 群馬県立高崎高校や埼玉県立熊谷高校がそれにあたる。

学問への志の芽生え

それもそのはずで，顧問は大学で考古学を専攻した人で，上級生も皆考古学（史学科）志望，卒業生も大学で考古学を学び，大学院に進んだり，教員になったり，自治体で文化財行政に関わっている人が多かった。しんどい環境だったためか，最初30名ほどいた仲間（１年生）は１年後にたった６名。それまでのぼくならとうに辞めていただろうに，不思議なことに残り，結局部活動には高校卒業後まで関わり続けることになりました。

今振り返ると，そこで出会った人間味あふれ，学問的な刺激を与え続けてくれた多くの人たちと，実証的な研究活動の積み重ねが，その後の人生のターニングポイントとなったことは間違いありません。研究することによって「不思議」や「疑問」を解き明かすことの面白さと醍醐味を味わい，学問（研究者）の道に進みたいという思いが次第に強くなっていったのです。



ごとう　のりあき
社会学科助教授。1956年長野県飯田市生まれ，茨城・群馬・埼玉県育ち。日本大学文理学部社会学科卒業，日本大学大学院社会学専攻博士課程修了。都市社会学・地域社会学・社会調査論専攻。主著：『社会調査へのアプローチ』（共編著，ミネルヴァ書房，1999），Tradition and Change in the Asian Family（共著，East-West Center，1994）ほか。

目からうろこが落ち続け

じゃあ，勉強もそれなりにまじめにやるようになったのですか？

学問への志を抱くようになったのだから，そう思うよね。ところが，これが違うんだ。好きないくつかの教科を除くと，授業はほとんど上の空で，

いつも部活動のことに思いを馳せているか，教師の目を盗んで本を読んでいるか……。だから学業面ではまともな生徒じゃなくて，成績もおそらく下から数えた方がずっと早かった。かといって特に引け目に感じたこともなく，いっぱしの研究者気分。

その上，岩波新書などによって目からうろこが落ち続け*3（いかに世の中のことを知らなかったのかを思い知らされた），現代社会（日本社会）と現代人（日本人）の抱えている様々な問題性に関する関心や好奇心がメラメラと燃えていった。要するに，現実の社会に「批判のまなざし」を向けるようになり，何故そのようになってしまうのかを解き明かしたいと思うようになっていったんです。

*3 当時読んだ本の中で最も強い衝撃を受けたものに，T・K生（「世界」編集部編）『韓国からの通信』（岩波新書，1974年）と，井上清・森浩一編『歪められた古代史』（毎日新聞社，1973年）がある。前者は，朴政権が1972年10月に戒厳令を敷いて以降の韓国内の状況を克明に伝えたT・K氏の地下通信をまとめたもので，朴大統領の命令で日本にいた金大中氏（現在の韓国大統領）が拉致され，殺されそうになった事件のことも出てくる。後者は，「我が内なる皇国史観」を徹底的に叩きつぶしてくれた本。

しらけと四無主義

その当時はどんな時代だったのですか？

ぼくが高校に入学したのは1972年ですから，東大や日大全共闘運動に代表される学園闘争（学生たちによる異議申し立ての一大ムーブメント）の嵐はすでに止んでいました。その後の若者は一転して「政治的無関心」に彩られ，「しらけ世代」とか「四無主義」（無気力・無関心・無責任・無感動）などといった言葉で語られ始めていたんです。ある種退廃的な空気が漂っていて，周りの連中を見ていると，「軽薄で，流行に流され，自分というものがなくて，社会への疑問や関心が欠如していて，色恋の話に明け暮れてばかりで，なんて極楽蜻蛉（とんぼ）なんだ」と思うようになったわけ。

「二粒の籾（もみ）」そして「心の灯」

そうした社会的な関心の高まりが，考古学から社会学へ進路を変えさせたわけですね？

それが必ずしもそうではないんです。当時の考古学部の仲間内でもっとも愛読されていたのは藤森栄一さん*4の一連の著作なんだけれど，ぼくも強い影響を受けていたんです。例えば，『森本六爾伝―弥生文化の発見史―』（河出書房新社，1973年。旧題『二粒の籾』）の最後の一節，「二粒の籾，地にこぼれ落ちたならば，ついには二粒の籾に終わらないだろう。君，――学問というものは，いや人生というものはね，そういうものなんだよ」とか，『考古学とともに―涙と笑いの奮戦記―』（講談社，1970年）の中にある「友にいってやりたい。なに，こんな迷った奴もいるんだよ。あせることも，あきらめることもないんだよ。君のその少年期につけた心の灯を消さぬように，ともしつづけていけばいいんだよ，と。疲れたら休めばいい。苦しければ中絶したって，心の灯に油を忘れさえしなければね」といったメッセージに熱くなって，勇気づけられ，励まされ，やっぱり考古学って人間くさくてロマンがあっていいな，と。

*4 ふじもり　えいいち
1911年長野県に生まれ，1973年に亡くなられた民間の考古学者。諏訪考古学研究所長，長野県考古学会長，日本考古学協会会員。『銅鐸』『かもしかみち』『縄文農耕』『信州教育の墓標』など著作多数。新田次郎の『霧の子孫たち』の宮森栄之助のモデルでもある。

ピカソの絵に「世紀の転換」!?

でもその一方で，小さな疑問も感じ始めていました。その頃の考古学研究には物証第一主義的な傾向が非常に強く感じられて，物（ブツ）がなければ始まらない。方法論的に言えば人文科学というより自然科学的で，藤森さんのようなドロくささやロマンが感じられない。

考古学に少しだけ距離感を感じ始めた頃，父の書棚にあった清水幾太郎さん*5の『現代思想』（上・下，岩波書店，1966年）を読んだんです。清水さんは後に転向して右派のイデオローグになってしまったけれど，その頃はまともで，切れ味も鋭かった。最初にいきなりピカソの「アビニヨンの娘」（1907年）を取り上げて，そこからリアリズムの否定やニヒリズムを読みとり，20世紀全体に向かっての予言的な意味を導き出したんです。よくはわからなかったけれど，衝撃的だった。社会学者が本の一番最初でピカソの絵を取り上げて世紀の転換を語る。「へー，社会学ってなんか魅力的だな」と思ったんですよ。

*5 しみず　いくたろう
1907年生まれ，88年死去。東京大学社会学科卒。元学習院大学教授。『流言飛語』『社会学講義』『社会心理学』『論文の書き方』『オーギュスト・コント』など著作多数。

考古学か社会学か

それで，考古学に進むか社会学に進むかで，揺れたんです。でも結局一本化できなかったので，二校ずつ受験したんですね，大学を。受かった方に進めばいいと考えてのことでした。

でも，何度も言っているように，日頃から勉強らしい勉強もしてないのに，受験勉強などするはずがない。当然のことながら全滅。ショックは全くありませんでした。それどころか，内心ホッとしたんです。「ああ，これで1年かけて進路（専攻）を決められる」ってね。

基礎演習での推薦図書

ということは，浪人時代に社会学に決めたわけですね？

そうなんです。大塚（豊島区）にあった（今はない）予備校に片道2時間以上かけて通いながら，社会学系の（社会学者や社会心理学者，民俗学

者，文化人類学者などが書いた）本を面白くて随分と読んだんです。見田宗介，日高六郎，藤竹暁，松原治郎，鶴見和子，加藤秀俊，南博，祖父江孝男，中根千枝，米山俊直，梅棹忠夫といった人たちの本。専門書じゃなくてね，新書や一般書だけど。

そうそう，ここ数年，１年生の社会学基礎演習で年間約50冊の新書・文庫を推薦して読書レポートを課しているのだけれど，その中にはその頃ぼくが読んで社会学へ進むのを決定づけたものが何点も含まれています*6。専門書との格闘もしましたね。D. リースマン（加藤秀俊訳）の『孤独な群衆』（みすず書房，1964年）。全部は読めなかったけれど，刺激的な体験だった。

*6 日高六郎『1960年５月19日』（岩波新書，1960年），きだみのる『にっぽん部落』（岩波新書，1967年），宮本憲一『地域開発はこれでよいか』（岩波新書，1973年），なだいなだ『権威と権力』（岩波新書，1974年），藤竹暁『事件の社会学―ニュースはつくられる―』（中公新書，1975年），中根千恵『タテ社会の人間関係―単一社会の理論―』（講談社現代新書，1967年），鶴見和子『好奇心と日本人―多重構造社会の理論―』（講談社現代新書，1972年），青井和夫『家族とは何か』（講談社現代新書，1974年）など。

社会学が見えてきた

それで，ぼくなりに社会学像を描いたんです。社会学とは，私たちの社会がどのように成り立っていて，またどのように変化していくのかを解き明かす学問なんだ，と。その際ぼくにとって重要に思えたのは，多くの人にとって見えていないことが，社会学によって見えるようになるということ。そして，見えないものが見えるようになることは，社会の変革を促す力になる（見えている人間が変革主体となる）ということ。

煎じ詰めると，社会学は実証的な方法で現状分析を徹底的に行って，社会を診断し，問題点を明確にして社会の変革を方向づける，極めて実証的で実践的な学問として映ったんです。社会学を本気で勉強したいと強く思いました。

二度目の受験

先生は社会学を学びたいと強い意志を持ちつつ文理学部に入学されたわけですが，その当時のあり様はどのようなものだったのでしょうか？

社会学系の本は沢山読んでも，受験勉強にはやはり真剣になれなかった。試験で高得点を取るためのテクニックを身につける作業に没頭することが，とても軽薄に感じて，人間の価値を貶めるように思ってしまったんです。

高校時代に先輩たちと取り組んだ前方後円墳の研究の成果*7を本にしたのも浪人時代でした。ほとんど毎週のように母校の部室に集まって，原稿を出し合い，議論を重ね，春も夏も合宿して，補充調査もした。そんな苦労を重ねて，ともかく1975年12月31日に発刊できた。入試直前のことでした。

*7 埼玉県の本庄・児玉地方とその周辺地域（群馬県を含む）の前方後円墳を，1972年から74年の足かけ３年がかりで合計15基測量して，形態学的な研究を行った成果を，『児玉郡及び周辺地域における前方後円墳の研究』と題する報告書にまとめた（埼玉県立本庄高校考古学部編集・発行）。専門学会などでも高い評価を得たが，巻頭言の一節に顧問（菅谷浩之先生）はこう書いている。「日曜日にいつも学校に来て生徒がよく研究していますね，と時々言われたことがあるが，この経験を今後に生かして，考古学のみならず，勉学にもより頑張り，来年４月には全員がそろって大学で会えるように切に希望する」，と。

初めての「挫折」

で，二度目の入試には社会学系の大学を４校受験し，結果的に日大に入ったわけです。1976年４月のことです。この事実を受け止めるのに時間がかかって，日大生である自分を前にしながら，日大生である自分を認められない，という状況に追い込まれたんです。もうコンプレックスの塊になった。初めての挫折経験でした。

日大は望んでいた大学ではなかったという事ですね？

正直に言うと，入りたくはない大学だったんです。だけど二浪はできない，どこかに入らなくていけないということで，日大も受けたわけ，初めて。そしたら結果的にここしか受からないという厳しい現実の前に打ちのめされた。でも社会学に対する思いも結構膨らんでいるし，致し方なく日大に入ったんだけれど，すんなりは認められなかった，日大生である自分を……。

日大生であるということ

でもね，しばらくしてから気づいたんです。大学に入るための地道な努力をしなかった人間に，「挫折」なんて言葉は当てはまらない。逃げてばかりいてはダメだ。現実と向かい合って，いま・ここに日大生として存在する自分をまずは認めること。その上で，お前は一体これから何をするのか／できるのか，今度こそ，自分の全存在と可能性をかけて勝負してみろ，とね。もし何事かを成就できないとしたら，それは日大生だからできないんじゃない，そのための努力を積み重ねないことにこそ原因があるのだ，と。

そう思えるようになったのは，周りの友人たちとの関わりが大きかったですね。ぼくが思っていた以上に，いろんなタイプの個性や能力を持っている面白い学生が多くて，入学直後から刺激を受け続けたんです。今までの自分の世界が非常に狭かったことにも気がついた。各界で活躍中の日大の卒業生が多数いることを知ったのも救いになった。

誰もが皆，人生の主人公

いわゆる「日大コンプレックス」を感じている学生はその当時も多かったし，今だって決して少なくはないんです。だから，そうした学生たちに言いたい。鬱屈したり後ろ向きになるのではなく，「大学４年間を使って，それまでの殻を剥ぎ捨てて，自分を磨き，とことん高めていくプロジェク

ト」に楽しみながら真剣に取り組んでみようよ，と。人生は大学入学時に決まってしまうわけじゃない，むしろその後の４年間でどこまで個性を磨き能力を高め，成長できるかにかかっている。勿論，入学段階に歴然とある偏差値上位校の学生との基礎学力差を埋める努力もしないといけない。でも，夢を抱き志を持ち続ければ，必ずできる。

それからね，日大生であることにはもっと積極的な意味もあるんです。日大の持つ雑多性（多様性）と雑草性（生命力）は，創造性とたくましさ／ヴァイタリティの母胎になるんです。「たかが日大，されど日大！」精神で，人生を切り拓いていってほしい。誰もが皆，人生の主人公なのだから……。

石器時代の社会学

先生が社会学を学ぶ上で師と仰ぐ人はどなたでしょうか？

関先生と梅沢先生のお二人ですが，その前に話したいことが……。

ぼくは前に述べたような社会学像を抱いていたわけですが，文理学部に入学してから授業で教わる社会学とは大きなズレを感じました。１年生の授業ではどれもこれも社会学の歴史の話ばかり，しかもコント，スペンサー，デュルケム，ウェーバーの繰り返し。現代社会に対する現状分析もなければ，社会診断もない。「石器時代の社会学」だと思ったんです。そんなのは本を読めばわかる。新しい解釈が示されるわけでもないから，つまらない。当時のぼくの関心に応えてくれるような授業は，社会学科にはほとんどなかったんです。

「夜明け前」の学生管理

当時の文理学部がまたおかしくて，歪んでいた。忘れもしませんが，入学してまだ間もない５月か６月頃，授業がつまらないから自分たちで研究会を作って勉強したい，ということをクラスの副担任に相談しに行ったんです。そしたら，「そんなこと止めろ，危険だ」と言われたんです。「研究会なんて作って固い本を読んだり，難しい議論をすると目をつけられてブラックリストに載ることになるから，自重したほうがいい」，とね。

この言葉が象徴的に示しているような異様な環境だったんです，当時は。正門も開いてなくて，学校に入るのに学生証を提示しないと入れなかったんです。学生が自主的な活動をするのに様々な制約があって，「自由」が保証されていなかった。人間として尊重されなかった。「暗黒時代」が続いていたんですね。

「学部は日大闘争から何を学んだのだろう，これではその当時の状況と同じで，学生ばかりか教職員だって浮かばれやしない」，そう思いました。当然のことながら，学生たちの不平・不満は蓄積し，２，３年後に大衆運動となって爆発しました。文理学部に，随分と遅れた「夜明け」がようやく訪れるのです。

社会学研究会と自主ゼミ

研究会ですが，「止めろ」と言われればぼくの「反骨精神」に火がつくというものです。すぐにクラスメイトに呼びかけて社会学研究会を作ったんです。１年生の時の夏休み前だったと思います。ぼくは会長になり，その後，最盛期には哲学や国文，中文の学生もいて，メンバーが30名近くにもなりました。「マルクスとウェーバー」「個人と社会」といった問題関心が強くて，１・２年の頃はそうしたテーマに沿った本をテキストにしてよく勉強し，議論しました。毎年必ずどこかで合宿もしましたよ。

２年生になってからは自主ゼミを立ち上げました。梅沢孝先生[*8]にお願いして指導していただくことになりました。カール・マンハイム（福武直訳）の『変革期における人間と社会』（みすず書房，1962年）をテキストにして，２年間かけてじっくり丹念に読んでいきました。テキスト・クリティークですね。これは，とてもいい勉強になりました。

*8 うめざわ　たかし
1918年生まれ。日本大学大学院（社会学専攻）修了。元日本大学助教授，元明星大学教授。主著：『大衆の社会学―民衆的大衆論の構築―』（明星大学出版部，1977年），『現代社会の変動論』（共編著，新評論，1981年）など。

研究室の「遺産」を発掘

３年生になってから，研究会ではそれまでの勉強を土台にして，いよいよ次は「現状分析」だ，ということになりました。どこを調査するか検討する中で，文理の図書館から偶然にも面白い報告書を見つけたんです。社会学研究室が1950年代中頃より1960年代初めまで，伊豆の白浜や下田を対象地として継続的に調査していて，その報告書が残されていたんです[*9]。

この一連の調査を貫いている問題意識は，かつて原始共産制村落などと評された白浜村落が，とりわけ伊豆急開業後の近代化の過程で，その社会構造と意識構造をどう変えていくのか，というものだった。で，報告書を読むと，面白かった。目を見張りました。「社会学史研究」が看板のようになってしまっているけれど，以前はこうした社会科学的な関心に裏打ちされた「現状分析」をしていたなんて，「灯台もと暗し」とはこういうことを言うのだな，と思ったわけです。

*9 『伊豆白浜の村落構造』1960年，『村落社会の実態』1961年，『鉄道敷設にともなう近代化の研究』1963年，いずれも日本大学文理学部社会学研究室の編集・発行。

伊豆白浜でのフィールドワーク

それでこの研究室の「遺産」を利用しない手はないと考えたんです。つまり，研究室の調査時から約20年後の姿を捉えることで，変化のありようをよりクリアに描き出すことができるし，そうした継時的な調査をやらなかったら「社会変動」は分からないと考え，伊豆白浜でフィールドワークすることにした。予備調査として何度か現地に行って，関係機関や地元の有力者に挨拶回りしながら，ヒアリングしたり，史資料を集めたり，本調査をどんな規模で，いつ頃行い，宿舎をどうするかなどを詰めたり……。

その当時の社会学科では，４年次に「社会調査実習」という科目があったのですが，その「実習」の中で白浜の本調査を実施するようにしたんです。調査票を作成し，依頼状と一緒に予め郵送しておいて，６月か７月だったかな，20数名で現地へ行って泊まり込み，白浜の世帯主全員（約700名）を対象とする悉皆（全数）調査を実施したのです。調査データを集計・分析し，手書きの報告書が出来たのが確か11月頃だったかな。

こうして調査の企画・設計から現地調査，データの集計・分析，アウトプットを出すまで，２年間をかけて全て自分たちの手で行えたことは大きな自信となりました。困難な作業を途中で放り出さずに，最後までやり遂げた，しかも制限時間内で。この経験は大きかったですね。

その後の研究スタイルの祖型

と同時に，この際の研究視点と手法が，その後のぼくの研究スタイルの一部を構成していくことになるとは，その時は思いもしませんでした。ぼくは，問題や事実の発見あるいは仮説発想のための調査活動と仮説の検証や理論化を志向した調査活動とを，同一のフィールドで循環的にしかも可能な限り長期間にわたって積み重ねるという循環的・継時的調査法と，他の地域との比較を重ねていく比較調査法という方針を，拠って立つべき調査のあり方と主張しているのですが*10，白浜調査で採ったのは前者の循環的・継時的調査法なんです*11。

目標へ向けての人生設計

学部の後はそのまま大学院へ進学されたわけですね？

はい，そうです。大学院進学はもう浪人時代に決めていたことでした。実はその頃に人生設計を次のように思い描いていました。社会学の研究者（大学の教員）になることがより高次の目標に設定されました。その実現（当面のゴール）へ向けて達成すべき課題群は，次の三つ。1．大学の社会学部または社会学科を卒業すること。2．大学卒業までに生涯の伴侶と出会い，学部卒業時に結婚すること。3．大学院へ進学し，博士課程（５年間）を終えること。

で，一番目は入学先が日大だったということで，揺らいだんですね。要するに，日大を出て大学の教員になれるのだろうかと思ったわけです。ところが，入学してから日大の先生の中に日大出身者が多いことを知ったんです。他大学にも意外と日大出身者が多い。社会学でも，結構著名な人で日大出身者が何人も。これには勇気づけられました，ほんとに。よし，これなら自分にだって可能性は大いにあるぞ，と思ったんです。

綱渡り人生の始まり

で，二番目。大学の研究者への道は遠く険しいから，自分のような弱い人間では，一人で苦境を乗り切ってはいけないだろう。だから，学部卒業と同時に結婚しよう，と考えたんです。飛躍と思い込みが激しいんだな。学部４年の９月だったかな，大学院の学内専攻があって，それにともかく合格できたので，それで結婚へ向けての準備に取りかかったんです。二人の間では既定の方針だったから，双方の両親を説得して（当然，反対だった），段取りをつけて，それで，ほんとに結婚したんです，卒論を出してから。1980年の２月，23歳の時でした。

その後はご想像にお任せしますが，まあ綱渡り人生の始まりですね。お陰で平衡感覚が少しは身につきました。

関清秀先生との出会い

三番目の大学院はいかがでしたか？

ぼくの研究領域は，学部時代から終始一貫，地域社会学（都市・農村・地域の社会学的研究）なのですが，大学院の専任の先生方でこの分野を専門としている先生がいなかったんです。ところが，マスター２年生の時に北大から関清秀先生*12が来られたんです，日大に。先生の研究は非常に幅広いんですが，ぼくの問題関心を包み込んでいて，更に幸運なことにドクターコースに進んで関先生の指導を受けられることになった。先生の存在はぼくにとっては絶大で，甚大な影響を受けています。ぼくの学問上の師であり，自分のポジションをはかる座標軸であり，研究者としてのモデル・

*10 例えば，後藤範章「マルチメソッドとダイレクト・オブザベーション―リアリティへの感応力―」（『日本都市社会学会年報』第14号，日本都市社会学会，1996年）など。

*11 この方法による成果としては，後藤範章「山間集落における局地的小宇宙性と村落結合―山梨県旧棡原村大垣外と青森県西目屋村大秋の50年―」（日本村落研究学会編『村落社会研究』第29集，農山漁村文化協会，1993年），後藤範章「交通インパクトの社会学的効果に関する実証的研究―埼玉県戸田市における埼京線開業後12年間の地域社会構造変動 ―」（『社会学論叢』130号，日本大学社会学会，1997年）などがある。

*12 せき　きよひで
1917年生まれ。東京大学社会学科卒。北海道大学名誉教授，元日本大学教授。『都市の青少年』（誠信書房，1963年），『都市の家族』（誠信書房，1965年），『都市の文化』（川島書店，1985年）など著作多数。